

第23回

『東京五輪音頭』に込められた 三波春夫の熱い思い

戦後、シベリアに抑留された私の父は、当地での体験をほとんど話さないまま二十数年前に逝きましたが、抑留先のとりの部隊に浪花節の上手な男がいて、どうやらそれが後年の三波春夫だったらしい、というエピソードは酒の席で何度か聞かされました。約4年という三波春夫の抑留期間は父と同じです。

2回目の東京オリンピックが2020年に開催されることが決まってから、再び『東京五輪音頭』にスポットが当たり、この歌の2020年バージョンが石川さゆり、加山雄三らによって歌われているようですが、「三波春夫の復活」を祝っているようでもあり、聴衆が神様なら、没後17年の三波春夫も「不滅の神様です」といった趣です。

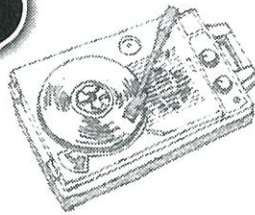
『東京五輪音頭』はコロムビア専属の古賀政男が作曲したのですが、「オリンピック」という国民的行事に配慮し、レコード各社に録音と発売権を許可したことから、競争時代のさきがけとなりました。

民謡の歌い手として古賀が高く評価していた三橋美智也を念頭に作られた曲でしたが、ご存じのとおり三

名曲カルテ

昭和歌謡と いままで

堀井六郎
絵・松本浦



波春夫の圧勝に終わります。

後付けになりますが、三橋と三波の人気の潮目はここで変わり、東京五輪の年の紅白のトリで長編歌謡浪曲『俵屋玄蕃』を歌った三波は、国民的歌手としての地歩を固めます。『東京五輪音頭』はその三波人氣に便乗して日活で映画化され、開会式まであと1か月という昭和39年9月9日に封切られました。

東京五輪の競泳種目で出場をめざす築地の仲買商の娘（十朱幸代）が奮闘するお話で、他愛もない内容ではありますが、半世紀ほど前の築地市場の様子や完成間近の国立競技場、駒沢競技場などが登場、空撮による首都高速の様子も描かれています。



候補選手の合宿シーンでは自由形の折り返しターンが映されますが、手をついてのターンが懐かしく、半世紀前の東京五輪で米國勢が圧倒した競泳男子のシヨランダールがクイックターンを披露して日本中を嘩然とさせたことが甦ります。中継のアナウンサーもどう表現しているのかわからなかったようで、「とんぼ返り」と形容していたように記憶します。

この映画で三波は寿司屋の主人と三波本人の二役をこなし、終盤には三波本人の舞台シーンとして、その年の4月に発売された『俵屋玄蕃』を全編通して披露してくれます。

村田英雄にも共通することですが、三波も幼い頃から浪曲に親しみ、プロとしても活動していたことから、台詞回しがめっぽううまく、この映画でも江戸っ子職人を難なく演じています。

十朱の祖父役・上田吉二郎に向かって「戦争で負けた日本が何とかしてここ一番云々」とオリンピック開催の喜びを力説するシーンでは、目が潤んでいるようにも見えましたが、あるいはシベリア抑留体験がもたらした自然の熱演だったのかもしれない。